

# サケを運んだ薩摩人

—カナダのサケ缶詰産業における日本人移民史—

河原典史

## I はじめに

第二次世界大戦以前、多くの日本人が太平洋を渡った。彼らはハワイ、アメリカ合衆国やブラジルなどへ渡航し、農業移民として活躍することが多かった。それに対し、カナダでは漁業移民として活躍した人も少なくない。特に和歌山県出身者の多くは、ブリティッシュ・コロンビア（以下、BC）州のフレーザー川河口におけるスティーブストンでのサケ缶詰産業に従事していた。かかるカナダ日本人移民について、やや排斥史観的な移民史から脱却するため、筆者は農業移民に比べて移動性に富む漁業移民の特徴を明らかにしてきた。具体的には、バンクーバー島西岸のサケ一本釣漁業、同島東岸のニシン巾着網漁業やハイダ・グワイ（クィーン・シャーロット諸島）における捕鯨業など、日本人の季節的移動や二次的な移住について論じてきた<sup>1)</sup>。

サケ缶詰産業における日本人漁業者を再検討すると、日本人は刺網漁業に携わることが多かったため、他の漁業関連業への関心は薄かった。筆者も造船に関わる和歌山県南西部出身者について報告<sup>2)</sup>したものの、他の生業については充分には考察してこなかった。そのひとつとして、刺網漁業で漁獲されたサケを収集し、サーモン・キャナリー（サケ缶詰工場）へ運搬する日本人漁業者については、その数が僅少であったことや資料上の制約もあり、これまで報告できなかった。先行の拙稿においても、手記からその一部の報告にとどまっている<sup>3)</sup>。

そこで、本稿ではフレーザー川河口南岸のカナ水路（Canoe Pass）に位置するブランスウィック・キャナリー（Brunswick Cannery）を事例とし、サケ缶詰産業における日本人サケ集配者の実態を明らかにする（第1図）。新たに発掘した一次資料を紹介するとともに、カナダ日本人移民史では報告されることの少なかった鹿児島県出身者の活躍<sup>4)</sup>について考察する。

## II ブランスウィック・キャナリーの諸相

### 1. 火災保険図の歴史地理学的活用

火災保険図はイギリス、アメリカ合衆国やカナダで産業革命の進展とともに発行されるようになった。19世紀後半から火災の危険性を査定し、被災後の補償を管理するため、Sanborn MAP & Publish Co.をはじめとする地図出版社は、大縮尺図の“Fire Insurance Plan（火災保険図）”を作成してきた。カナダ西岸のBC州では、1885年のビクトリアやバンクーバーなどから作成が開始された。都市域以外でも製材、缶詰や精練などの各種工場とその周辺施設で、同種の地図が作成された。この図には、建物1棟毎に建築物の形状や用途が記号と彩色によって明示されている<sup>5)</sup>。

BC州では、必ずしも都市域だけで火災保険地図が作成されたわけではない。1924年にBC保険



第1図 フレージャー川河口とカナ水路

－地名（斜体）はおもな日本人集住地区－

協会が編集・発行した“*Plans of Salmon Canneries in British Columbia together Inspection Reports on Each*（『BC州サケ缶詰工場図集成』以下、『工場図集成』）”は、当時の主要産業の1つであったサケ缶詰産業を担うサーモン・キャナリー毎に、解説ページと火災保険図からなる<sup>6)</sup>。

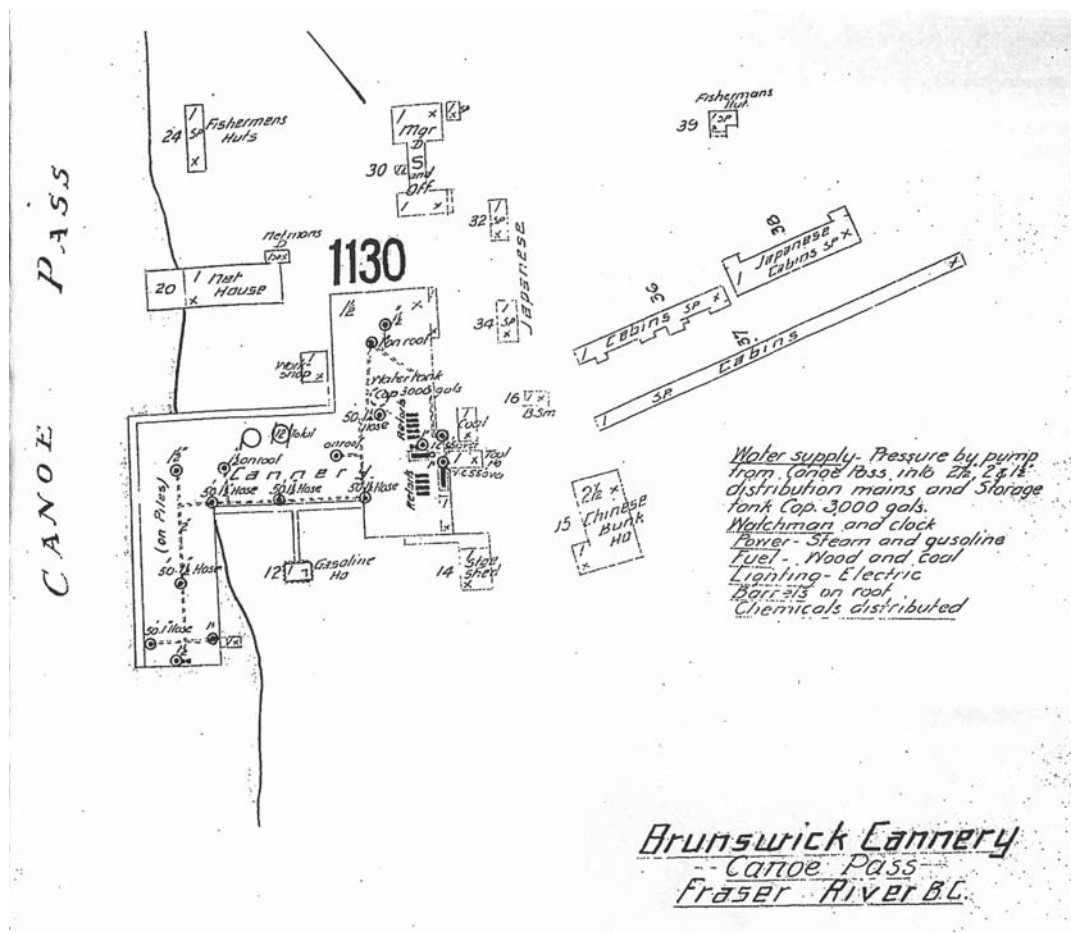
解説ページの右側には、*Fish Cannery Survey*として各キャナリーの基礎データが記載されている。そこにはキャナリーの名称、所有者、本社や支配人に続いて、創業年（休業年の有無）、年間の操業月、サカイ（紅鮭）やコーホー（銀鮭）など材料となるサケの種類や、直近5年間（1918～1922年）の生産缶数などが記されている。過去の火災や保険金の授受、ストライキなどの労働問題や建物・機器評価額など、保険業に直接関わる情報も示されている。これらの基礎データに続いて、解説ページの左側や別紙には、項目毎に詳細な説明がある。缶詰工場の中核にあたる *Cannery Building*（缶詰製造所）については、構造・面積・階層・屋根材料・動力の様子が記載されている。機械については、数枚の刃によって一度に数匹のサケを切断できる *Iron Chink*（鉄の中国人）という機械の存在も確認できる<sup>7)</sup>。移民研究において、とくに興味深いのは被雇用者の国籍の併記である。さらに歴史地理学的研究において、大縮尺地図である火災保険図が添付され、その読解から日本人漁業者の諸相が理解できる。

## 2. 『工場図集成』にみるブランスウィック・キャナリー

『工場図集成』によれば、ブランスウィック・キャナリーは1897年にブリティッシュ・コロンビア・フィッシング&パッキング会社の缶詰工場の1つとして建設された。他の系列工場で4月から

6月に製造された空缶が移送されるこの工場では、6月から10月にかけてサケ缶詰が製造される。移民史研究にとって重要な被雇用者の国籍（民族）の記載をみると、工場長のF.G.Bellを中心とするイギリス系のほかに日本人と中国人、そしてインディアン（ファーストネーション）が従事していた。

『工場図集成』に収録された72キャナリーをみると、日本人は6割強にあたる44ヶ所のキャナリーで雇用されていたが、中国人は日本人を上まわり、8割を超える59ヶ所のキャナリーで従事していた。従業員が単一の国籍（民族）で構成されることはなく、最多のタイプはインディアン・中国人・日本人からなる組み合わせで、それは38ヶ所（55.1%）を示した<sup>8)</sup>。ただし、国籍（民族）ごとの実数は不明であるが、Returns（報告書）や Debits（個人別帳簿）など他の資料との併用により、次のような傾向は読みとれる。BC州南部のキャナリーでは一定数の白人が従事し、漁獲とサケの集配を日本人、缶詰作業では中国人が主力となり、インディアンが補完的労働力として担っている。それに対し、北部のキャナリーでは一部の白人が重要な業種に就くものの、中国人はほとんどおらず、漁獲と缶詰作業は日本人とインディアンが担っているのである。この相違は、BC州最大の都市・バンクーバーに近接するキャナリーでは、アジア系移民を比較的容易に取り込んでいるのに対し、北部ではそれができていないことを示している<sup>9)</sup>。残念ながら、同種の資料を発見していないブランスウィック・キャナリーでは、国籍（民族）別の雇用形態は不明である。しかし、同キャナリーはBC州最南部に位置するため、拙稿で論じたように日本人漁業者は刺網漁業、そして動力船を利用したサケ集配を担っていたと推測できるのである。



第2図 ブランスウィック・キャナリーの火災保険図（上部）



ブランスウィック・キャナリーの『工場図集成』(第2図)と、ここを写した複数の古写真を読解すると、次の諸相が明らかになる。火災保険図に方位記号は描かれていないが、カナ水路の位置から上部は東を指している。カナ水路岸に建てられたこのキャナリーは、他と同様に缶詰工場とその附属建物からなる。卍型をした前者は漁獲されたサケをすぐに水揚げ、そして缶詰材料に不要な内蔵をすぐに廃棄するため、一部が河川上に建てられた杭上家屋となっている。約60m規模のここでは、石炭が燃料として利用されていたため、蒸気や噴煙を逃す煙突が古写真には写っている(第3図)<sup>10)</sup>。工場の東隣には、乾燥後に刺網を収納する網小屋(nethouse)がある。スティーブストンの大規模なキャナリーには倉庫(warehouse)も併設されていた<sup>11)</sup>が、このキャナリーにはなかった。

キャナリーの大きな特徴は、工場に隣接して従業者の住居が建てられることである。工場の東方の内陸部には、“Mgr D and Off”と記された建物が描かれている。Dはdwelling、Offはofficeの略記であり、これらはキャナリーの事務所を兼ねた経営者の住居である(第4図)。一方、工場の南部には、“Chinese Bunk”と記された中国人用の一棟が描かれている。単身で従事する中国人男性のため、住居内部に二段ベッドを並べた寝台舎(bunk)が用意されたのである。それらに対し、“Japanese Cabins”と付された日本人用簡易住居もみられる。日本人は家族を形成し、それぞれが戸建住宅、あるいは内部を区切った長屋式住宅に住んだ。1908年のレミュー協定後にカナダへの移住が制限されるようになると、日本人社会では妻子の呼び寄せが増加し、家族単位でキャナリーに住むようになったのである(第5図)。最東部に“Fisher mens Huts”と記された小さな家屋が2棟ある。これはインディアンの住む小屋(hut)である。当時、原住民である彼らにも住居は提供されていたが、それは



第3図 ブランスウィック・キャナリーの遠望  
 - 缶詰工場の右側に中国人寝台舎、その隣に日本人住居が写る (1930年頃) -  
 (高崎家古写真コレクション)



第4図 ブランスウィック・キャナリーにおける経営者の住宅  
 -写真の裏には「この会社の社長が住居していた家なので立派なものです」と記されている-  
 (高崎家古写真コレクション)



第5図 ブランスウィック・キャナリーの子供たち  
 (高崎家古写真コレクション)



日本人や中国人のものと比べると粗末であった。

なお、大きなキャナリーには、造船所が設置されることも少なくない。多くのキャナリーでは、漁閑期における漁船の新造や修理を日本人が担っていた<sup>12)</sup>。特に動力船が導入されると、和歌山県南部出身の船大工が渡加するようになった<sup>13)</sup>。また、2世を対象とする日本語学校が併設される場合もあった。さらに、日本人住宅に隣接して球場（ビリヤード場）が設けられることもあった<sup>14)</sup>。しかし、いずれもフランスウィック・キャナリーにはないので、ここは小規模なキャナリーであったと解せるのである。

### Ⅲ ブランスウィック・キャナリーの鹿児島県出身者

『工場図集成』が作成された1920年ごろ、ブルンスウィック・キャナリーに従事する日本人は、14名ほど確認できる（第1表）。『加奈陀同胞発展大鑑 附録』に収められた鹿児島県出身者の記録<sup>15)</sup>によれば、彼らの半数は鹿児島県指宿と加世田出身である。後述する高崎家からの聞き取り調査によれば、1名の静岡県出身者を除く他のほとんども同郷者であったらしい。

1913（大正2）年に発刊された『政腑公認 加奈陀鹿児島懸人会史』<sup>16)</sup>は、渡加した先駆者について次のようにまとめている。1886（明治19）年10月、神戸港に停泊していたサンフランシスコをめざすグランドホーム号の水夫募集に5名が応じた。彼らは現在の鹿児島市出身の谷口政吉と林半之承、そして指宿市出身の濱崎直次郎、森松次郎と黒岩三四郎であった。サンフランシスコ上陸後、カナダ・ビクトリアへ移送された彼らはラッコ漁<sup>17)</sup>などに従事し、やがてバンクーバーやスティーブストンに移った。それは、製材業やサケ缶詰産業など、より多くの就業機会が求められたからである。

第1表 ブランスウィック・キャナリーの日本人

名 前	出 身 地	家 族
高崎 幸男	鹿児島県指宿郡指宿村	高崎幸助・長男
高崎 幸助	鹿児島県指宿郡指宿村	妻・アイ
原田 栄吉	鹿児島県指宿郡指宿村	
肥後 萬吉	鹿児島県指宿郡指宿村	
福島 正二	鹿児島県指宿郡指宿村東方	福島鐵太郎・二男
林 禎介	鹿児島県川辺郡西南方村	
田畑 市次	鹿児島県川辺郡東加世田村小湊	妻・ツナ
満石 複蔵		指宿？
高橋 一雄		高崎（指宿）？
高橋 一男		高崎（指宿）？
高崎 幸治		高崎（指宿）？
田畑 市郎		加世田？
田畑 稲雄		加世田？
鈴木 茂雄	静岡県賀茂郡仁科村字浜	鈴木茂平二男

『加奈陀同胞発展大鑑 附録』（1922）、ならびに高崎家からの聞き取り調査による

川辺郡加世田村から指宿村の濱崎家へ養子になった直次郎の渡航は、その後の加世田方面からの連鎖移住を惹起させた<sup>18)</sup>。1907（明治40）年6月16日、ステューブストンの故・濱崎直次郎宅において、約30人からなる鹿児島県人会が設立された。会長・木場清次郎、副会長・下高原幸三<sup>19)</sup>に続き、先駆者の林とともに後述する高崎幸太郎は会計として名を連ねていた<sup>20)</sup>。

その後の渡加者は少なかったものの、1907年には東京移民合資会社<sup>21)</sup>による契約移民として、およそ400人の鹿児島県出身者がカナダへ渡った。バンクーバーにおける日加用達会社の後藤佐織<sup>22)</sup>は東京移民合資会社と提携し、同年の6月から翌年1月にかけて約1,500名の契約移民をカナダに受け入れた。鹿児島出身者は最も多く、全体の約4分の1を占めた<sup>23)</sup>。横浜を発った彼らは、およそ1,000名の鉄道工夫と500名の炭鉱夫とに大別できる。カナダ到着後に日加用達会社を経て、鉄道工夫はカナダ太平洋鉄道（Canadian Pacific Railway 以下、CPR）の沿線、炭鉱夫はおもにバンクーバー島のカンバーランドへ送られた<sup>24)</sup>。炭鉱夫となるのは加世田を中心とする薩摩半島中央部、鉄道工夫は半島南部の枕崎や指宿、ならびに桜島周辺の鹿児島出身者であった。前者では、金・鉄鉱石など、鉱業に関わる生業が展開していた。それに対し、後者では海運業の拠点としての地域性が強かった<sup>25)</sup>。つまり、鉱山労働の経験者やそれを知る若者は炭鉱夫、その経験のない者は鉄道工夫として渡加後に配置されたようである<sup>26)</sup>。3年の契約を終えると、彼らは他産業へ転業することが多かった。人里離れた山奥で落盤や倒木、とりわけ雪崩の危険性は南国の鹿児島県出身者にとって想像できない恐怖であったろう<sup>27)</sup>。

そのため契約満了後、彼らはBC州沿岸部のサケ缶詰産業へ転業することが多かった。バンクーバーを中心とする製材業界には、先達として滋賀県出身者を中心に多くの日本人が従事していた。それに対し、サケ缶詰産業では、前述したようにBC州沿岸におよそ100ヶ所のキャナリーがあり、日本人の受容先としては重要であった。とはいえ、フレーザー川河口のステューブストンでは、先駆者・工野儀兵衛<sup>28)</sup>の連鎖移民による和歌山県日高郡出身者が多くいた。そのため、鹿児島県出身者はステューブストンから離れ、比較的新しく小規模なキャナリーへ従事せざるをえなかったと考える<sup>29)</sup>。外務省外交史料館に所蔵されている『外国旅券下附表』によれば、ブランスウィック・キャナリーでは肥後萬吉（1884年生）と田畑市次（1889年生）はCPRへの契約移民であった。また、福島鉄太郎（1868年生）はステューブストンに先住していた高崎精次なる人物の呼びよせで、1908（明治41）年に渡加している（第1表）。このキャナリーにおいて、指宿をはじめとする薩摩半島南部の出身者がほとんどを占めていた史実は、鹿児島県カナダ移住史を総合的に検討することから理解できるのである。

#### IV サケ集配をめぐる歴史的資料

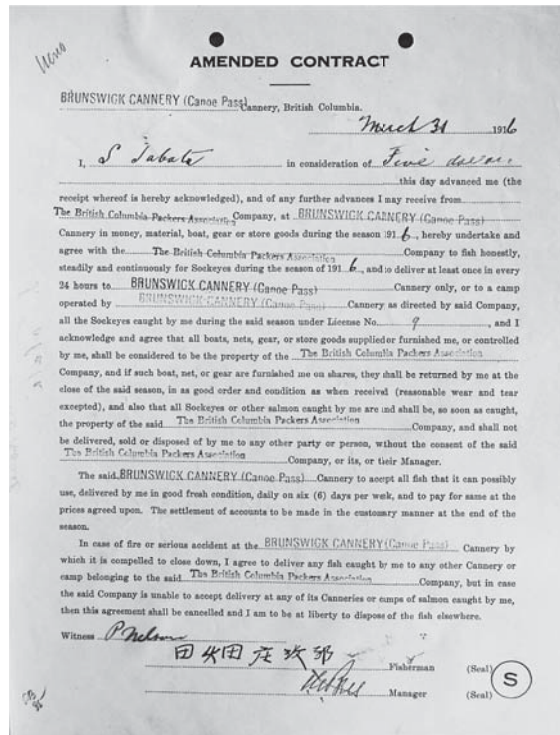
##### 1. デルタ文書館に残された資料

デルタ文書館（Delta Archives）には、サケ缶詰産業に関する多くの資料が所蔵されている。1916年、ブランスウィック・キャナリーと漁業ライセンス（漁業権）による雇用契約を結んだ田畑庄次郎（1873年生）のContract（契約書）について検討してみよう（第6図）。漁船・漁具を賃貸され、週6日漁業に従事することになった彼は、第1表にある田畑市次と同郷で、やはり当初では1907（明治40）年に東京移民合資会社の契約移民としてCPRに従事していた。当キャナリーへサカイ（Sockeye・

紅鮭)を中心とするサケ類を取める旨が記されたこの契約書では、会社名・キャナリー名が押印されていることから、この書式はBC州共通になっていたと思われる。冒頭には契約日が手書きで記入され、その下段には“1”に続く空欄に被雇用者が“S.Tahata”と手書きで記入されている。そして最下段には、「田畑庄次郎」と日本語での署名がある。

漁獲されたサケ類は、魚種毎に計算されて記録される。第7図は漁業者毎の漁獲を記録した、いわゆる仕切書である。1915年7月20・21日のものをみると、漁獲者はNo.437と略記され、詳細は不明である。下段の漁獲表には、レッドスプリング (Red Spring)、ホワイトスプリング (White Spring) やサカイなどの魚種毎の記入欄が設定されている。右欄には重量や単価に応じた価格が記入されるが、この資料では記入されていない。このような書式を採るのは、サカイが最も高価で缶詰に適しており、魚種によって価格が異なるためである。そして、最下段の“per”には、20日に3匹、21日には2匹のサカイの漁獲を確認した集配者“Taka”の署名がある。これは、ブランスウィック・キャナリーのサケ集配者である高崎幸助 (kosuke) のことであろう。

日々の漁獲は計算され、一定期間の集計によって給金が漁獲者に支払われる。資料をみると、集配者のTakaも1921年10月11日にC\$22.50を受け取っている<sup>30)</sup>。そして、1922年6月10日のものをみると、S.TakasakiがC\$247.00を受け取っている(第8図)。前者が高崎幸助であるに対し、後者は血縁者の幸男 (sachio) と思われる。他の同種の資料と比較すると、ブランスウィック・キャナリーのサケ集配者であった高崎家は、比較的高額を受給していた。サケ収集にあたって高崎家は、ライセンス番号をもとに各漁業者の漁獲したサケ類の種別や重量などを確認し、それに応じてキャナリーから給与が支払われていたのである。



第6図 ブランスウィック・キャナリーと田畑庄次郎との雇用契約書 (Contract)  
- 所定の書式に契約日・被雇用者の署名や会社・工場名の押印がある -  
(デルタ文書館所蔵)



**B. C. PACKERS' ASSOCIATION**  
**BRUNSWICK Cannery**

Received from N. A. 437  
this 20 July 1915  
N<sup>o</sup> 191

No. FISH	KIND	WEIGHT	PRICE	VALUE
	Red Spring			
	White Spring			
<u>3</u>	Sockeye			
	Steelhead			
	Cohoe			
	Hump			
	Chums			

**Brunswick Cannery**  
Per Saka

**B. C. PACKERS' ASSOCIATION**  
**BRUNSWICK Cannery**

Received from N. A. 437  
this 21 July 1915  
N<sup>o</sup> 377

No. FISH	KIND	WEIGHT	PRICE	VALUE
	Red Spring			
	White Spring			
<u>2</u>	Sockeye			
	Steelhead			
	Cohoe			
	Hump			
	Chums			

**Brunswick Cannery**  
Per Saka

第7図 ブランズウィック・キャナリーの仕切書 (左: 1915年7月20日・右: 7月21日)  
- 魚種毎に漁獲が記録される -  
(デルタ文書館所蔵)

No. 139 B. C., June 10 1922

Received from The British Columbia Packers Association

Two hundred forty seven 57 100 Dollars

\$247.57 S. Takasaki

第8図 ブランズウィック・キャナリーから高崎家への支払書 (1922年6月10日)  
- 高崎幸男へ C\$247.00 支払われている -  
(デルタ文書館所蔵)

## 2. サケ集配者・高崎家に残された古写真

サケ集配者は経営者や工場長の指示を理解し、それを漁獲を担う日本人に伝えるため、日英両語を理解する必要があった。そのため、他者よりもカナダへの先住者であることが多かった。そうすると、第1表において高崎家は他者よりも先に渡加していたと考えられる。

前述した『外国旅券下附表』には、高崎幸太郎・幸助親子の渡航について以下の記録がある（現物は縦書）。

### 【資料（抜粋）】

明治39年5月8日

高崎幸太郎 戸主・指宿郡指宿村十二町479戸番 旅行地名・晩香坡、渡航目的・全（商業）

明治39年5月8日

高崎幸助 幸太郎長男、渡航目的・語学研究

先述した東京移民合資会社による契約移民の渡航前年に、41歳と17歳の高崎親子は自由移民として渡加している。その後の詳細は不明であるが、新興のフランスウィック・キャナリーに落ちついた彼らは、先住者としての優位性から、後発の日本人漁業者が漁獲したサケの運搬を任されたのである。

高崎家に残る古写真には、当時のキャナリーの様子が手に取るようにわかる<sup>31)</sup>。船首に“TAKA”と記された運搬船をみると、操舵室の船尾側に棒状のものがある（第9図）。これは、各漁業者が漁獲したサケ類の計量機である。計量後に仕切書に記入されると、サケ類は運搬船の生け簀に移される。満載されたサケ（第10図）によって、運搬船の喫水線が大きく下がっている様子がわかる<sup>32)</sup>（第11図）。



第9図 高崎家のサケ集配船

— 船首（左側）に“TAKA”と船名が記され、船尾側（右側）には計量器がある —  
（高崎家古写真コレクション）





第10図 ドッグ・サーモン（白鮭）で満載になった高崎家の集配船  
 -生け簀にサケが満載されている-  
 (高崎家古写真コレクション)



第11図 ブランスウィック・キャナリーに繫留された高崎家の集配船  
 -生け簀のある船尾側（右側）が沈んでいる-  
 (高崎家古写真コレクション)



## V 「漁業移民」の再考—おわりにかえて—

本稿では、これまでほとんど紹介されなかったカナダにおける鹿児島県出身者の活躍を論じた。彼らは薩摩半島南部出身者が多く、多くは東京移民合資会社による契約移民であった。3年間の契約期間で慣れない仕事、とりわけ南国育ちの彼らにとって、カナダ内陸部における CPR の保線工に就いて冬季の除雪作業は厳しかったにちがいない。契約期間を終えた彼らは、BC 州のサケ缶詰産業へと転じたものの、そこではすでに和歌山県出身者が多く従事していた。そこで彼らは、ブランスウィック・キャナリーのような新興のキャナリーに活躍の場を求めたのである。そこには英語を理解できる先住者がおり、彼らは契約を終えた同郷者のリーダーになった。キャナリーから動力のサケ集配船を賃貸された先住者は、漁業者が漁獲したサケ類を収集し、キャナリーへ運搬していたのである。

本稿で考察したように、カナダのサケ缶詰産業に関わる日本人漁業者は、渡航前には必ずしも漁村出身の漁業経験者ではなかった。鹿児島県出身者には、特にその傾向が著しい。そうすると、これまでのハワイ、アメリカやブラジルへの移民研究で多用されてきた「農業移民」に対して、「漁業移民」という用語も慎重に使用せねばならない。生業を農業とすることが多かった日本人のほとんどは、渡航先でもとりわけ初期には「農業移民」として活躍した。しかし、カナダで鉄道工夫や炭鉱夫からサケ缶詰産業に転業した日本人移民を安易に「漁業移民」と総称することは、再検討しなければならないのである。

## [付記]

本稿の執筆にあたって、古写真のご提供や聞き取り調査に多大なご高配をいただいた故・高崎満様 (1923～2015 年)、ならびに高崎家のみなさまに厚くお礼申し上げます。そして、高崎家をはじめとするカナダ渡航者のご縁を紡いでいただいた時遊館 COCCO はしむれの方々に深謝します。また、貴重な資料をご教示いただいたデルタ文書館 (Delta Archives) の方々にお礼申し上げます。

本稿は、2015-2019 年度科学研究費基盤研究 (C) 「カナダ契約移民の輩出と渡航後の地域的展開をめぐる歴史地理学的研究」(代表・河原典史)、2013-2017 年度科学研究費基盤研究 (A) 「環太平洋における在外日本人の移動と生業」(代表・米山裕) の成果の一部です。要旨については、地域漁業学会第 58 回大会 (2016 年 10 月 30 日・別府市豊泉荘) において発表しました。

最後になりましたが、本稿を故・高崎満様のご霊前に捧げます。

## 注

- 1) 著者の先行研究は次の拙稿、ならびにそこで紹介した注 3)～9) を参照のこと。河原典史「20 世紀初頭のカナダ西岸における塩ニシン製造業の歴史地理学的検討—是永・嘉祥家を中心に—」、立命館文学 645、2016、119-136 頁。
- 2) 河原典史「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開—和歌山県出身の船大工のライフストーリーから—」、立命館言語文化研究 17-1、2005、59-74 頁。
- 3) ①河原典史『カナダ日本人漁業移民の見た風景—前川家「古写真」コレクション—』、三人社、2013、1-198 頁。②河原典史「カナダ・フレーザー川における日本人漁業者の漁場利用—日記と視察報告書から—」、国際常民文化研究叢書 1、2013、173-194 頁。
- 4) 筆者は鹿児島県出身のカナダ移民について、以下の予察を記している。河原典史「カナダへ渡った指宿の人びと—新しい地域史のために—」、指宿市考古学博物館・時遊館 COCCO はしむれ平成 23・24 年度博物館年報・紀要、2013、16-23 頁。

- 5) カナダにおける火災保険図の成立とその後の展開については、以下の文献による。Diane L. Oswald: *Fire Insurance Maps: Their history and Applications*, Lacewing Press, 1997, pp.1-102. Frances M. Woodward: *Fire Insurance Plans and British Columbia Urban History: A Union List*, *BC Studies* 42, 1979, pp.13-50. Lorraine Dubreuil & Cheryl A. Woods: *Catalogue of Canadian fire insurance plans 1875-1975*, *Occasional Papers of the Association of Canadian Map Libraries and Archives* 6, 2002, pp.1-485. 筆者はこれらを展望し、その歴史的地理学研究の活用方法を以下に報告した。河原典史「カナダ・ブリティッシュコロンビア州における火災保険図をめぐる基礎的研究」、財団法人国土地理協会平成23年度学術助成研究、2011、95-111頁。
- 6) 『工場図集成』は、ブリティッシュ・コロンビア大学の特別資料室 (Rare Books & Special Collections Precision) に所蔵され、1992年には163枚のマイクロフィルムに複写されている。この複写版はモノクロであるが、キャナリーの様子と、そこに従事する日本人について読解できることは少なくない。1枚の索引図と目次に続いて、1ヶ所ずつのキャナリーが1,200分の1、または600分の1の縮尺で描かれている。地図の右肩に付された番号が113までであることから、BC州に点在する100以上のキャナリーのうち重要なものだけが採録されていると判断される。その手順として、1897年にフレーザー川流域、1915年にはスキナー・ナース川流域におけるキャナリーの火災保険地図がすでに作成されていたことが索引図の注釈から推察される。当時、100ヶ所以上あったキャナリーのうち、1923年8月から10月にかけて再調査された72キャナリーが『工場図集成』に収められたようである。①前掲5)の拙稿。②河原典史「『BC州サケ缶詰工場図集成』にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究19-4、2008、243-266頁。
- 7) 解説ページでは生産ライン数、塗料庫、塩蔵庫、冷凍・冷蔵庫、缶製造機など、生産工程の詳細が記されている。他にもボイラー棟、燃料棟などの大型付属施設がある場合、それぞれについての建物構造が記される。さらに、缶詰製造業をめぐる関連産業、つまり鍛冶師・大工・桶屋・機械工・船大工などの職工や、漁網・燃料保管庫なども付属建物の存在が記されている。これらの建物・施設には番号が付され、地図と対応できる。
- 8) 前掲6) - ②。
- 9) 河原典史「Returns (報告書) と Debits (個人別帳簿) にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究20-4、2009、77-105頁。
- 10) 現在の工場跡はプレジャーボートの繋留所となっており、当時の面影はみられない。
- 11) 前掲6) - ②。
- 12) 河原典史「第二次世界大戦前のカナダにおける日本人就業構造」、地理月報501、1-4頁。
- 13) 前掲2)。
- 14) 前掲6) - ②。
- 15) 中山訊四郎『加奈陀同胞発展大鑑 附録』、1922、258-269頁 (佐々木敏二『カナダ移民史資料 第3巻』、不二出版、1995、640-651頁)。
- 16) 加奈陀加奈陀鹿兒嶋懸人会編『政府公認加奈陀鹿兒嶋懸人会史』、1-1913頁。なお、宮崎県都城図書館に所蔵されたこの史料については、立命館大学文学部の山崎有恒教授のご教示による。
- 17) 筆者は、1900年代初頭にビクトリアで造園された日本庭園について、その企画と造園にあたった岸田伊三郎・芳夫親子について報告した。そこでは、北太平洋におけるラッコ漁の閑散期に造園に関わった日本人の可能性を指摘した。河原典史「ビクトリアの球戯とバンクーバーの達磨落とし—20世紀初頭のカナダにおける日本庭園の模索—」、(マイグレーション研究会編『エスニシティを問いなおす—理論と変容—』、関西学院大学出版会、2014、所収)、249-265頁。日本人の海獣漁と移民については、今後の大きな課題である。
- 18) 加世田～知覧にかけての南薩地方は北米～南米への移民を多く輩出している。川崎澄雄「知覧・穎娃からの海外出稼ぎ者と海外移民 (その一)・(その二)・(その三)」知覧文化23・24・26、1986・87・89、99-117・51-68・53-72頁。
- 19) 「幸蔵」とも記録される下高原の経歴は、以下のように記されている。「明治33年7月にビクトリアに上陸。漁業、看護夫、米国移民官通訳。コロンビア大学に通学、シカゴ医科大学に進学。大正4年日本人

- で初めてシカゴ医術開業試験に合格し、大正5年5月はBC州医術開業試験に合格、医院を開業。」中山訊四郎『加奈陀同胞発展大鑑附録』、1922、508-510頁（佐々木敏二『カナダ移民史資料第2巻』、不二出版、1995、544-546頁）。
- 20) 前掲16)。
- 21) 東京移民合資会社は、1897（明治30）年に資本金2万円で横浜市弁天通（現在の横浜市中区）に開業した。社長の斎藤忠太郎は東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業後、横浜商法会議所（現在の横浜商工会議所）に入所した。その後、日本絹綿紡績会社を経て、彼は東京合資会社を起した。横浜商工会議所編『横浜開港五十年史（下巻）』名著出版、1973、201頁。同社はカナダだけでなくハワイ、アメリカ合衆国、オーストラリア、メキシコやブラジルへ契約移民を送出した。
- 22) 鉄道や道路の建設と改善、林業全般、貿易などに必要な労働者派遣会社であった日加用達会社は、1906（明治39）年にバンクーバーにおいて資本金10万ドルで設立された。社長は Charles Gardiner Johnson であるが、同社の中心人物は副社長の後藤佐織であった。1870（明治3）年に福井市で生まれた後藤は、1889（明治22）年にアメリカ・サンフランシスコへ渡航後、ウェイターやコックなどの労働を経て、鉱業に携わった。その後、ノーザン・パシフィック・レールウェー・カンパニー邦人労働者請負に従事した彼は、事務員を経て支部長、そして監督に就いた。その後、カナダへ移った彼は、1906年に労働者請負の幹旋会社を設立した。前掲19)、270-271（306-307）頁。
- 23) 東京移民契約合資会社によるカナダへの契約移民の出身地は、わずか10県に限定されていた。266名の熊本県と175名の宮城県に次いで、福井県から154名がカナダへ渡った。ほぼ同数で沖縄県出身者がみられ、以下は福岡・静岡・岡山県と続き、そして神奈川県と栃木県出身者となる。河原典史「カナダ・ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者—忘れられたカナダ日本人移民史—」、(吉越昭久編『災害の地理学』、文理閣、2014、所収)、193-210頁。
- 24) 熊本・宮城県出身者のほとんどは、鉄道工夫である。福井県については、154名のすべてが鉄道工夫である。つまり当時のカナダでは、保線にあたる鉄道工夫の需要が大きかったのである。前掲23)。
- 25) 江戸末期、指宿を根拠地とした濱崎太平次は北海道から九州、さらに琉球方面におよぶ海運貿易業を営んでいた。この「海の向こうを知る力」と、帆船から動力船への変化にともなう余剰労働力との発生が近代になって多くの移民を輩出させた遠因かもしれない。この点は、今後の大きな課題である。指宿市役所『指宿市誌』、1958、194-209頁。
- 26) 河原典史「移民会社によるカナダ日本人移民の予察的研究—カナダ太平洋鉄道への契約移民を事例にして—」、2013年人文地理学会大会要旨集、2013、48-49頁。なお、東京移民合資会社による契約移民の輩出先と生業との関係性については、別稿を準備中である。
- 27) 筆者は、これまで見過ごされてきた CPR の雪崩災害に被災した日本人の実態を明らかにした。1910（明治43）年3月4日、BC州内陸部のセルカーク山脈に位置するロジャーズ峠で雪崩が発生した。除雪作業に携わっていた70余名のうち、大規模な第二次雪崩災害によって58名の鉄道工夫が落命した。そのうち32名は日本人であり、彼らの多くは契約移民として3年間の労働契約を結んだ出稼ぎ移民であった。前掲23)。また筆者は、第二次世界大戦以前のカナダにおいて最大の日本語新聞『大陸日報』に掲載されたロジャーズ峠の雪崩災害の記事、とりわけ葬儀の様子から20世紀初頭のカナダ日本移民社会の諸相について論じた。河原典史「1910年の悲劇はいかに報道されたか—カナダ・ロジャーズ峠の雪崩災害と日本人移民社会—」、(河原典史・日比嘉高編『メディア—移民をつなぐ、移民がつなぐ』、クロスカルチャー出版、2016、所収)、131-156頁。
- 28) 「三尾を制するものはスティーブストンを制す」という俗言があるように、サケ缶詰産業における和歌山県出身者の影響は絶大であった。和歌山県編『和歌山県移民史』、1957、538-542頁。
- 29) 宮城県登米郡米川村（現在の宮城県登米市）出身の及川甚三郎は、1906（明治39）年に密航船・水安丸を仕立てて渡加を企てた。カナダ上陸後、一定期間 CPR の鉄道保線工に従事することを条件に、彼らの入国が許された。その後、密航者は先住していた及川が経営するフレーザー河下流の中州における及川島のスジコ工場へ移った。このように、CPR 保線工からサケ缶詰産業へ転業する日本人移民は多かったと思われる。①新田次郎『密航船水安丸』、講談社、1979、1-1343頁。②小野田寛一『カナダへ渡った東北の村：—移民百年と国際交流—』、耕風社、1996、1-1500頁。③山形孝夫『失われた風景—日系カナダ漁民の記



録から一』、未来社、1996、282頁。いわゆる「密航船・水安丸」事件と翌年の東京移民合資会社との関りは深く、今後の筆者の大きな課題としたい。

- 30) 筆者はハイダ・グワイ（クィーン・シャーロット諸島）の捕鯨基地へ日本食料品を納品する日本人商店の実態を知るため、BC州文書館所蔵の銀行小切手を活用した。河原典史「20世紀初頭のカナダ西岸における捕鯨業と日本人移民」、地域漁業研究 52-2、2012、65-83頁。同様に筆者は、ブリタニア銅山に従事する日本人労働者についても小切手から考察した。その場合、1ヶ月に2回の給与支払いが確認できた。河原典史「カナダへ渡った美浜町の人々」、(美浜町誌編纂委員会編『ふりかえる美浜（通史）—美浜の歴史・第一巻—』、2010、所収）、212-215頁。
- 31) 筆者は、2014年に公開された映画「バンクーバーの朝日」への資料提供や、テレビでの特集番組の監修などに関わった。そのとき高崎家の古写真も提供し、映画・TV番組に活用された。この件は、西日本新聞（2015年12月9日）に故・高崎氏へのインタビューとともに紹介された。
- 32) 海上の漁撈活動について収められた古写真は、極めて貴重である。筆者はバンクーバー島東岸におけるナナイモ湾のニシン巾着網漁業の様子を写した古写真から、当時の漁場利用を考察した。河原典史「1920年頃のカナダ・バンクーバー島西岸におけるニシン漁業の漁場利用—調査報告書と古写真から—」、国際常民文化研究叢書 1、2013、173-184頁。このように、英語を理解する先住者がキャナリーのサケ集配者になる事例は、フレーザー川北流のイーバンにおけるバンクーバー・キャナリーでの前川勘蔵も同様であった。前掲 3) - ①。

(本学文学部教授)

Salmon Carriers in the Canned Salmon Industry of the Canadian West Coast  
at Brunswick Cannery, Canoe Pass: A Case of Fishermen from Kagoshima Prefecture, Japan

by  
Norifumi Kawahara

This paper reveals the actual conditions of Japanese salmon carriers in the canned salmon industry by considering the case of fishermen from Kagoshima Prefecture who worked at Brunswick Cannery, located in Canoe Pass to the south of the mouth of Fraser River on the Canadian west coast.

According to the “Plans of Salmon Canneries in British Columbia together with Inspection Reports on Each, 1924”, at Brunswick Cannery, which was established in 1897, other than those of English descent, Indian (First Nation), Chinese and Japanese workers lived in huts, bunks and cabins respectively and produced canned salmon. This rather small cannery was located far away from Steveston, and, according to the “Record of Addresses of Japanese Residents” (“kanada zairyu houjin innmeiroku”), fourteen Japanese workers and their families lived there.

The Delta Archives include a contract that Tabata Shojiro made with Brunswick Cannery; having received a Ninth Fishing License in the fishing season of 1916, he borrowed a fishing boat and fishing equipment and went fishing six days a week. In this contract, which states that Tabata was to deliver salmon, mostly red salmon, to the above cannery, the company and cannery names were printed using a seal impression, which indicates the possibility that this format was common in the state of British Columbia.

Almost all of the Japanese workers at this cannery were from the south of the Satsuma peninsula. Among them were workers who had initially come to Canada as contract immigrants employed by the Tokyo Immigration Joint Stock Company and had worked as railway workers and coal miners until the expiration of their contracts. After their contracts expired, these kinds of workers tended to move to the coastal regions of British Columbia to work in the canned salmon industry. However, they had to look for employment in newer and smaller canneries, since it was difficult to get a job at canneries in Steveston, which had already employed many Japanese workers from Wakayama.

Takasaki Kousuke and his son Sachio, who were from Ibusuki in Kagoshima and who had previously traveled to Canada in 1905 for a “business tour” and “studying”, could understand English, and due to this they were able to borrow a power boat from the cannery for carrying salmon that Japanese fishermen had caught to the cannery. Old photographs from the Takasaki family show the power boat loaded full with salmon and equipped with scales to weigh the catch. Takasaki recorded the type and weight of the salmon that each fisherman had caught according to the license numbers. The cannery paid the fishermen their wages according to those records.